

シンポジウムの記録

歴史文化の保存・継承と防災対策

——東海資料ネットの設立に向けて——
(前編)

掲載にあたって

東海国立大学機構大学文書資料室

令和元（二〇一九）年二月二三日（日）、名古屋大学東山キャンパスを会場に、地域歴史文化大学フォーラム「名古屋「地域資料保全のあり方を考える」が開催された。

これは、名古屋大学大学院人文科学研究科と人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学共同利用機関ネットワーク事業」が主催したものである。そのほか、共催団体として、愛知県立大学日本文化学部、岐阜聖徳学園大学教育学部、中部大学文学部歴史地理学科、名古屋大学減災連携研究センター、名古屋大学文書資料室、名古屋歴史科学研究会、科研費特別推進研究「地域歴史資料学を基軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者・奥村弘）研究グループ、科研費基盤研究（B）「木曾三川流域における治水関係文書の高度活用に関する研究」（研究代表者・石川寛）研究グループが、後援団体として、国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター、愛知大学総合郷土研究所が名を連ねた。

このフォーラムは、詳しくは天野真志氏の趣旨説明に譲るが、地域の民間所在資料の保全活動、特に災害からの救助活動を行う「資料ネット」を東海地域に設立するにあたって、その趣旨を広く地域にアピールするために開催された。フォーラムの企画は、名古屋大学を中心とする東海地域の歴史学系の大学教員からなる「東海資料ネット設立発起人」を中心に、天野真志氏（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館特任准教授）や斎藤善之氏（NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事長、東北学院大学経営学部教授）のご教示の下に進められた。

名古屋大学文書資料室（現在は東海国立機構構大学文書資料室、以下「資料室」）は、資料室が所蔵する名古屋大学史資料は地域資料でもあること、さらにまだ資料室が所蔵していない名古屋大学史資料が民間に多く所在していること、また専任教員である堀田慎一郎室員が東海資料ネット設立発起人の一人であったこと、等に鑑み、このフォーラムを共催することにした。共催にあたっては、堀田室員がフォーラムの事務局長的な役割を担ったほか、

配布資料の取りまとめ作業を資料室のスタッフが行い、当日は堀田室員と魚住奈都子事務補佐員が勤務の一環として参加した。

このフォーラムは、第一部のワークショップ「資料の緊急対応を考える」（午前10時～11時30分、会場は文系共同館1AB講義室）と第二部のシンポジウム「歴史文化の保存・継承と防災対策―東海資料ネットの設立に向けて―」（午後1時～17時30分、会場は名古屋大学大学院人文科学研究科第二三七講義室）からなっている。第一部には定員一杯の三〇名、第二部には大きな講義室がほぼ満員になる一五八名もの参加者があった。この特集は、第二部のシンポジウムの記録である。

シンポジウムは、名古屋大学大学院人文科学研究科の齋藤文俊研究科長による挨拶で始まった。齋藤研究科長は、関係者への謝意を述べたうえで、地域の歴史資料の保全が重要であることや、そのためには専門家の知識・技術が必要であることは言うをまたないが、同時に活動や保存のための場所と経費も必要であり、その重要性を歴史に興味のない人々に理解してもらうためにもこうした取組みは重要であって、自分も勉強させていただきたい、などと述べた。

そして、まず天野真志氏（前出）が趣旨説明を行った。次に、加藤規博氏（愛知県総務局総務部法務文書課県史編さん室主幹、現在は愛知県西三河県税事務所）、岡田靖氏（一般社団法人木文研代表理事（令和三年四月から理事）、帝京大学文化財研究所准教授（令和三年四月から東京藝術大学大学院美術研究科教授）、齋藤善之氏（前出）、今津勝紀氏（岡山史料ネット代表、岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）による報告が行われた。次いで、黒田和士氏（愛知県美術館学芸員）、大塚英二氏（愛知県立大学日本文化学部教授）、奥村弘氏（歴史資料ネットワーク代表、神戸大学大学院人文科学研究科教授）によるコメントの後、報告者とコメントーターをパネリストとし、会

場参加者も交えてのパネルディスカッションが行われた。

そして最後に、人間文化研究機構（以下、機構）の佐藤信理事による挨拶があった。佐藤理事は、関係者への謝意を述べたうえで、①このシンポジウムが東海の地で多くの参加者の熱気と盛り上がりの下に実現したことに感激していること、②機構では二〇一八年度より、国立歴史民俗博物館、東北大学、神戸大学の、三つの中核拠点を軸として、全国の資料ネットの方々と連携し、歴史文化資料の保全とその活用・発信を通して、地域社会における歴史文化の継承と創成を目指す事業を進めてきたが、その中で広域の相互支援体制を推進する努力も進めていること、③その点でこのフォーラムは、東海地域での資料ネットワークの形成を目指したものであり、機構も大変期待を抱いていること、④機構はこれからも各地の資料ネットとの協力・連携関係を広げて、災害時の資料保全と共に、平常時においては資料を生かした地域の歴史文化の振興にも広く取り組みたいと考えていること、等について述べた。

また、シンポジウム終了後、名古屋大学生協南部食堂二階の「彩」において、八〇名近くの参加者を得て、立食形式による意見交換会を行った。

本号では、趣旨説明と四つの報告について、音声記録を活字化したものを掲載した。これにあたっては、報告者ご本人による校訂を経ている。三つのコメントとパネルディスカッションについては、次号に掲載する予定である。

なお、このフォーラムの後、令和二（二〇二〇）年二月二六日（日）に設立総会が行われ、同日をもって東海歴史資料保全ネットワーク（通称「東海資料ネット」）が発足した。詳しくは、ホームページ（<https://tokaishiryonet.wixsite.com/website>）をご覧ください。

